

**規模拡大だけでは解決不可**

昨年11月に農水省が公表した「2025年農林業センサス結果の概要」は、全国の農林業経営体がこの5年で23・2%もの激減を示しており、大きなショックをもたらした。これは「農林水産統計」で広報されたが、その冒頭に「農業経営体の減少が続く中、法人経営体は5年前に比べ7・9%の増加。1経営体当たりの経営耕地面積は3・7ヘクタールとなり、0・6%の増加。また、経営耕地面積20ヘクタール以上の農業経営体の面積シェアが、初めて5割を超えるなど、規模拡大が進展。」との要約がある。経営体減少は基調であるとし、規模拡大の進展に専ら関心を寄せる書きぶりには違和感大だ。担い手の不足は深刻であり、農業と同時に農村の崩壊が懸念される中、こうした書きぶりは理解に苦しむ。

**酒米を主力に地域農業を維持**

ここで長野県伊那市高遠町三義地区の農事組合法人・山室の活動

状況等を報告しながら、現場の実情の一例だが共有しておきたい。

三義地区は高遠町の中心部から車で15分ほど、天竜川に注ぐ三峰川の支流である山室川に沿って集落が点在する山間地域である。谷間の傾斜地を利用して農業が営ま

が栽培困難であることから酒米を主力にし、地元の酒造メーカーと連携して日本酒という以上に地酒づくりに力をいれてきた。ズッキーニやブロッコリー等の野菜と合わせて、近年では在来品種のもち米「青もち」の栽培にも取り組んでいる。

**時流を  
読む**

**地元  
に愛着を  
持てる  
農業**

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

れており、棚田が続く見事な景観が展開する。

担い手の減少と耕作放棄地が増加する中、営農組織で農用地を維持管理していくことをねらいに、農事組合法人・山室は2005年に設立された。寒冷につきコシヒカリ

現在、約40人の組合員で20ヘクタールの農地を維持管理している。なお、三義地区の世帯数は98で、約半数が移住者となっている。

**農家は力業では作れない**

その農事組合法人・山室は、移

住者の受け入れに力を入れると同時に、組合員とのコミュニケーションを重視しており、初め会、豊年会や、自分たちが生産した米で作ったお酒を飲む新酒会等、飲み会も度々開催している。また消費者との交流も盛んで、「米を売るだけでなく、来てもらってこの地域を知ってもらいたい」として、消費者を対象に田植え、稲刈りによる交流を継続している。

これらの取組が評価されて、17年には農水省が行っている豊かな村づくり全国表彰事業で農水大臣表彰を受賞している。

代表の大塚治男さんは、儲かる農業と生活していける農業の後者は、贅沢を言わなければ頑張れる。愛着があるから頑張りは苦にならない。農地を守る、農業者を作るという視点から、地域に愛着を持った農業で農業者の数を確保していくことが大事、と語る。農地拡大より農業者の数を増やすことが肝心、との信条に共感するとこ